

院内報「みらい」(薬の話 糸の話)

薬の話

最近では市販薬として新しい薬が次々開発されていますが、薬の宣伝がテレビやラジオで毎日のように流れ、一般の人に間違った情報が伝わる事があります。

その例の一つがインドメタシンの塗り薬です。インドメタシンは鎮痛・消炎剤の代表的な薬で医薬品としては20年以上前から使われている薬です。塗り薬としてだけではなく飲み薬(錠剤や粉薬)や貼り薬(湿布剤)として整形外科のほか、内科の先生方など、医療の分野ではかなり以前より使われている薬です。処方箋がなくても(医師の指示がなくても)一般の人が自由に手に入れるようになっただけで決して新しい薬ではありません。また、一般の人が自由に手に入れることができるため、薬の飲み過ぎや、飲み方の間違いが起こる危険があるので、薬の濃度を薄くしたりして、飲み方を間違えても安全なようになっています。

もう一つの薬が胃の薬です。潰瘍の治療薬のいろいろなものが市販されてきました。昔は胃潰瘍というと治りにくい病気で手術をする事が多かったのですが、潰瘍の良い治療薬が開発され手術をしなくても治るようになってきました。その、よく効く薬が市販され始めたのです。効果がある反面、副作用も色々あり、一般の人が何も知らないで長い期間薬を飲み続ける事は心配なことです。

よく効く薬が市販されると、病院に行く時期が遅くなり重症化、あるいは手遅れになる事を心配する専門家もいますが、新しく市販された薬を上手に使いたいものです。

糸の話

「傷は何針ですか?」「抜かなくていい糸ですか?」傷を縫った患者さんによく聞かれる質問です。

人間の体を縫う糸は昔と今では大きく変わりました。まず糸の材質。昔は体を縫合(縫う)する糸は絹糸(絹の糸)だけでしたが、現在ではナイロンをはじめとする化学繊維の糸がほとんどです。タンパク質でできているため拒否反応を起こす事があった絹糸と比べナイロン糸では体と反応を起こす事が少なく、傷跡が残りにくくなりました。

また、昔は糸と針は別々で、絹糸を針に通してから縫合していましたが、ナイロン糸では糸と針とを最初からつなげる事が出来るため、針に糸を通す手間をなくしたり、針も小さくする事ができるようになったため、糸の太さがかなり細くでき、直径1mmの血管も顕微鏡を使って縫合する事が出来るようになりました。また、化学繊維の中には体の中で解けてしまう糸もあります。解けてしまう糸は、後からでは糸を抜く事が出来ない体の中を縫合するときに使われますが、離れた皮膚をしっかりと寄せ付けなければならない皮膚の縫合には使われません。さらに最近では、糸や針を使わずにホチキスの様な金属で皮膚などを留めることも行われています。

医療材料も年々進化しているため、私達医師も新しいものを覚え、勉強していかなくてはなりません。あと何年かすると切り傷も接着剤やレーザー光線の様な光で痛みもなく治す時代が来ると思います。

院長 木内 哲也

